

平成29年10月1日発行 第23巻第5号(通巻第134号)

ナイフの魅力余すところなく網羅した専門誌

J.W. & John Denton

ラプレス・コレクション(前編)

デラウエアメイド〜ローンデール

加藤清志のダマスカス・ナイフ

DAMASCUS Knives of KATO

藤田國宗作 小刀薄縁

はたらく刃物[竹細工]

ナイフマガジン

10
vol.134

Hirayama HIRAYAMA

平山晴美

気魄に満ちたナイフ製作と、その深化

根本朋之

NEMOTO KNIVES



J.W. & John Denton

Delaware Maid ~ Lawndale

J.W. & ジョン・デントンのラブレス・コレクション

—デラウェアメイド～ローンデール—

前編



ラブレスのことは彼に訊け

ジョージア州ハイアワシー。アトランタから車で北に2時間ほど、緑に囲まれた小さな街である。

もう25年以上前から、「ラブレスナイフのことなら、J.W.に訊くといい」と、あちこちで聞かされてきた。

何れも、もう25年以上も前からラブレスナイフのコレクションを続け、そして専門のディーラーになってしまったのだという。一度話を伺いたいと思っていたのだが、いかんせんハイアワシーは遠かに遠く、近頃はJ.W.自身もナイフショーにはそれほど顔を出さなくなっているとかで、機会を逃していた。

ところが昨年9月、初めて訪れたシカゴ・カスタムナイフショーで、興味深いテーブルに行き当たってしまったのである。

このシカゴショーというのは、現在急激に観客動員数を増やしている比較的新しいショーで、全米、土曜の2日間、通常のナイフショーだけでなく、タタチイカルナイフ専門の抽選方式ショーやカスタムナイフ・オークションなどを詰め込んだ、新しいスタイルのイベントなのだ。テーブルのキールダー（出展者）もバラエティに富んでいて、アーニー・エマーソン、ジョン・ヤング、ブライアン・タイ、チャリー・ワイズといった様々なメンバリーやディーラーが揃っている。そんな中に、珍しいローンデール時代を始める、ラブレスナイフをやり取りとばかり、20本以上も並べているテーブルがあった。

テーブルの奥で、若い男性が喋っている。愛蔵品はすべて自分のコレクションから選んで



DELAWARE MAID "Old Fiddler"
 ブレード長7 1/2インチ、全長12 3/4インチ、MILITARY DELAWARE MAID-FIGHTING KNIFE。1955、クリップに合わせて再塗装し、レダーフインナーハンドリングのボウナイフ。

「このナイフは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。これは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。これは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。」

「このナイフは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。これは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。これは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。」

「このナイフは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。これは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。これは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。」

「このナイフは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。これは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。これは、私が初めて買ったもので、とても気に入っています。」

出会い、コレクション

J.W.テントンとボブ・ラフレスの交流は、今までのぼる事25年以上前、1980年代初頭に始まる。

「当時の私はボケットナイフのコレクターで、ケイス社やシュレイド社といったファクトリーナイフの珍しいものを出はと持っていたんだ。」

だが、ある日、これらのコレクションに「どうもじっくりいかないものを感じてしまった。持つ喜び、が絶滅になって



ニューヨークにある高級スポーツ用品店「アバークロンビー&フィッチ」の展示が入っている。おそらく1950年代頃に納入されたものであろう。



**DELAWARE MAID
"Hunting #5"**
ブレード長4.38インチ、全長8.1/4インチ、ブリーチングP12に施されたハンターモデルと類似している1本。ただしシリアルナンバーは62。

しまったんだ。

当時といえは、ナイフメイカーズギルドが発足して10年、ブレイドマガジンも創刊され、一般にコレクションの対象としてナイフが注目され始めた頃である。「そこで出会ったのがラブレスナイフだった。そのデザイン、質感、仕上げ、握りやすさ、機能性、どれもとっても最高だったな。早速本人に電話をしたよ」

J.W.は1950年代、カーレースのプライベートドライバードライバーとして活躍していた時期がある。車が好きでナイフも最初から愛用者としていたのだそうだ。「その頃私が使っていたイギリス製のリースエンジンに、「エイバー」というのがあってね。なんとボブもエイバーのファンだったのさ」

そうして始まったふたりの付き合いは、1985年、ノックスビルで開催されたブレイドショーで直接会って、より緊密なものとなる。そう、それまでの数年間は、ナイフのオーダーや日頃のやり取りなど手紙や電話が中心で、親密ではあったがまだ会った事はなかったのだ。

「なにせ3000マイルは離れているからね。ともあれ、直接会うことが出来て私の眼に狂いがいいことははっきりしたよ。何はともあれ、凄いやつだった」

ここで、J.W.はボブにとって練習に水の申し出をする。

「当時のボブは人気メイカーではあったが、参加していたショウで持ってきたナイフがすべて売れてしまう、というほどではなかった。値段が他のメイカーより高かったからね。それで、もし持ち帰るナイフがあるなら、すべて私に譲って欲しい、と頼んだのさ」

それからJ.W.は「買い」に走る。市

場にあるラブレスナイフは、すべて「買い」だ。ボブには資金がオーダーをいれたいもした。珍しいモデルを手に入れるために、手元にあるナイフを売る、文藝するといふのは当たり前で、どんどん自分のコレクションを充実させていったのである。数多くのコレクターとも関係が深まっていった。

「中でも重要になったのは、アル・ウィリアムズだったな。リビング・オン・ジ・エッジ」という本を知っているか？これはもう、ラブレスコレクターなら必ず持っているといえるバイブルで、その著者の色から「グリーンブック」と呼ばれている。

「あの本は1992年に発行されたのだが、紹介されているナイフのうち何本かは我々が一緒に探したものだよ」

「そんないきさつがあって、アルのコレクションはそのほとんどが私の手元のことになったのさ」

そう、今回の取材でわかったのだが、あのグリーンブックに登場した、ラブレスナイフの各時代を象徴するナイフ連の多くは、今もデントン家が所有している。四半世紀以上にわたって手裏を繰り返しきたコレクション、それが「デントン・コレクション」なのである。

デラウェアメイド・ローンデル

本稿では、デントン家の協力により写真枚数が大幅に増えたこともあり、コレクションを前後編に分けて紹介したい。今回は、ラブレスナイフの創成期であるデラウェア期から、様々なモデルが生まれていく模様、充実の期間となったローンデル期をカバーする。



**DELAWARE MAID
"Hunter's"**

上：ブレード長4.18インチ、全長8.1/2インチ。下：ブレード長3.5インチ、全長7.1/2インチ。これもアバークロンビー&フィッチの展示が入ったハンター、ブラスのヒルトが美しい。

ラブレスナイフが、生まれたいきさつはよく知られている。若き日のボブが、高級スポーツ店であった「アバークロンビー&フィッチ」に、当時高級カステムであったローンデルナイフを買いに行った。若輩の船員といったボブの外観から、けんもほろろの扱いを受けたことで一先発起して、ローンデルを握るカステムナイフを作り始めた、というあれである。



**Harry Archer Collection
"Fighter"**

ブレード長 1.24インチ、全長 11.314インチ。美しいチェーリッシュウッドのハンドルを覆われたファイター。



**Harry Archer Collection
"Big Bear"**

ブレード長 1.44インチ、全長 13.314インチ。これもハリー・アーチャーが考案したの有名なローンデル・ロゴのブーツナイフ。ブラックマイカルハンドド。

ハリー・アーチャー コレクション

デントン家の門外不出コレクションは多種多様で、そのいわれを訊いているだけで目が暮れてしまう。そのすべてを紹介するのは不可能なので、ラプレスナイフの中でも人気の高い「シュートナイフ」に関する「面白話」を披露しよう。

まず、シュートナイフの名前がどこから来たか、ご存知だろうか。まあ、アルファベットを見れば一目瞭然なのだが、「パラシュート」の下、それもミリタリー関係者用にデザインされたナイフ、と

いう事でこの名が付いたのだ。

このシュートナイフをデザインした張本人は、ハリー・アーチャーという、最終戦での軍隊経験を持つ狂者であった。ハリーは、「ナイフズ」などの著書であるケン・ワナーと友人で、以前から戦場でユーティリティナイフを探していた。それまでも、パラシュート降下時にロープの緊急切断が必要になった際に使えるブッシュダガー（ガットフックのようなロープ切断ツールが装備してあった）を開発していたが、より広範囲でパラシューターが使えるナイフを考え続けてい



**Harry Archer Collection
"Boot Knife"**
(上)

上：ブレード長 5.5インチ、全長 11.74インチ。ローンデル・ロゴのブーツナイフ。ダブルグラインドのシェイプはすでに完成されている。

"Sticker" (下)

ブレード長 4.114インチ、全長 11.314インチ。ブーツナイフより薄く、ヒドリング構造で作られている。

J.W. & John Denton のラフレシ・コレクション
J.W. & John Denton
Delaware Made ~ Lawdale

Harry Archer Collection
"Sub-Hit"

ブレード長 175mm、全長は 210mm、
約 40g ほど軽量な作りになっている。ラフ
レス・コレクションのコンセプトとして
選んだサブコンパクトサイズ、サブ
コンパクトとしてある選んでいる。How to make
knife という本が参考に作られたとされている
ナイフだ。



2pcs.Stag Banana Skinner

ブレード長4 1/4インチ、全長8 1/2インチ。グリーンブックP42に載る。スキナー、通常より幅の狭いブレード、横目したヒール、2ピース・スタップ、コンパス内蔵などの特徴がある。



90度オフセットとして、プラスチック (Duro wood) エイロメング樹脂をプラスチック材で加工しているのがあった。ヒール部分のヒールシェンもオフセットである。

Utility Hunter

ブレード長4 1/2インチ、全長9 1/4インチ。タンクに「70-401」と刻印されている為、1970年に作られたと思われるユーティリティハンター、グリーンブックP31掲載。

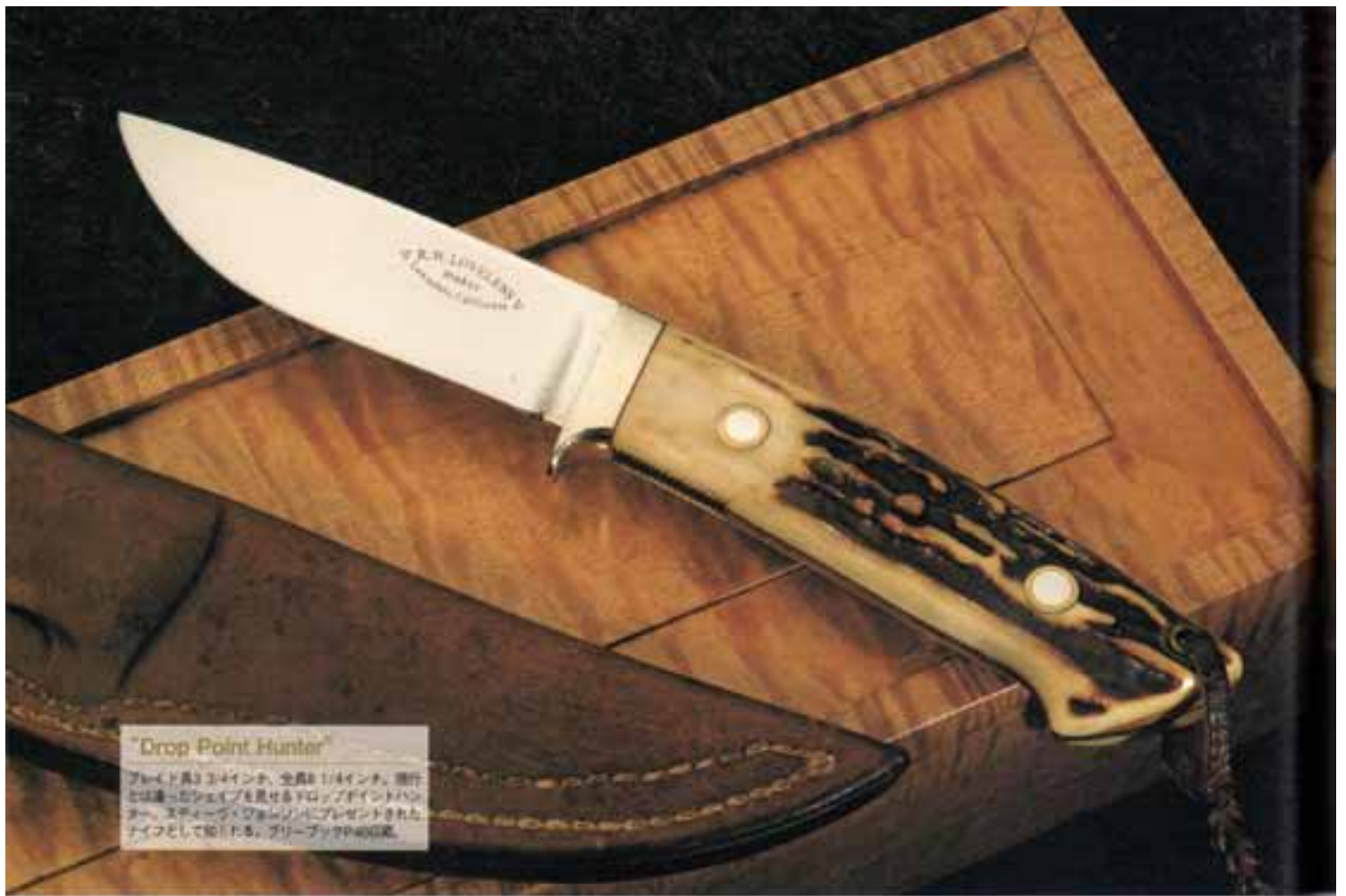


たのである。

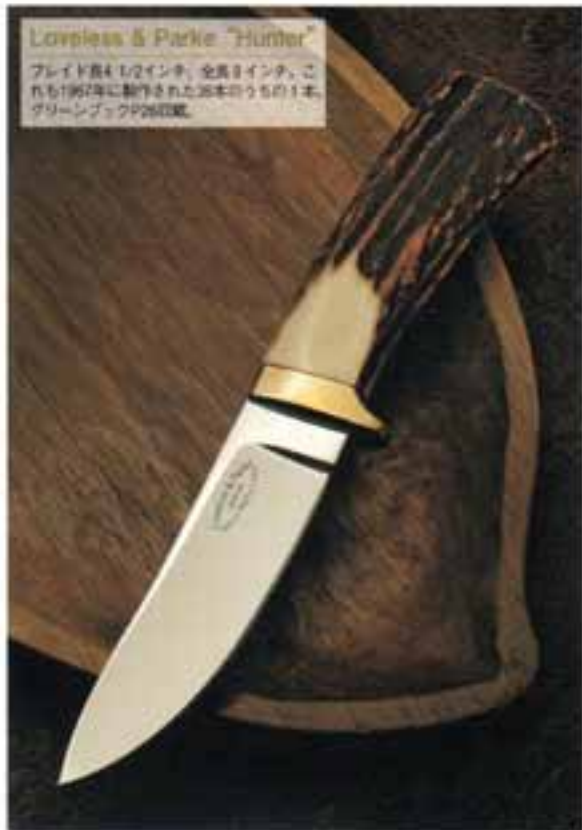
基本的なアイデアはあった。あとはそれをどう具体化するか、だったのだ。そこでナイフ界に詳しいケンが思いついたのが、当時ナイフのデザインならこの人といわれていたボブ・ラブレスだった、というわけだ。

そして出来上がったプロトタイプは、ハリーが理想としていた機能とスタイルをすべて併せ持っていた。細かな変更はあったが、さうしてかの有名な「シユートナイフ」が完成したのである。

ラブレスナイフの完成度が気に入ってしまったハリーは、その後も細かな意見を白刃好みにしたナイフを次々とオーダーしていった。そして集まったのが、現在はデントン家に在るハリー・アーチャー・コレクションという事になる。



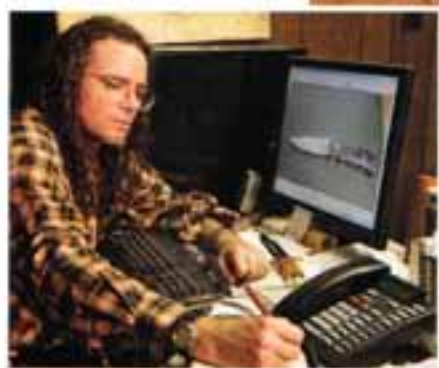
"Drop Point Hunter"
 ブレード長3.4インチ、全長8.1/4インチ。流行
 的なドロップポイントを見せるドロップポイントハン
 ター。エマーソン・ワイルドにプレゼントされた
 ナイフとして知られる。グリーンブックP4000。



Loveless & Parke "Hunter"
 ブレード長4.1/2インチ、全長5インチ。こ
 れも1967年に製作された36本のうちの1本。
 グリーンブックP26000。



**Loveless & Parke
 "Semi-skinner"**
 ブレード長5.1/2インチ、全長10
 1/2インチ。アイボリーハンド
 ル。1967年に36本だけ製作され
 たといわれている。"ラブレス&パ
 ーク シェリヤドレ" からフォルス
 アのロゴが入ったナイフのうち1
 本。



メールをやりとりし、仕事をこなすジョーン。定期的にマイブレンダーとしての仕事の手配では、ジョーンがこなしている。

LOVELESS/JOHNSON
**"Improved Handle
 Semi-skinner"**

ブレード長3 1/2インチ、全長8 1/2インチ。ダブルロゴ、インブルーグッドハンドル、ブラウンマイカホルダー、と膝してから目のまをスキナー。

LOVELESS/JOHNSON
"Randall Hunter"

ブレード長2 3/4インチ、全長5 3/4インチ。ボアのハンティング特製。Randall氏がデザインした小型ハンター。短いブレード、ヒルトレスハンドルのシェイプなどに特徴がある。

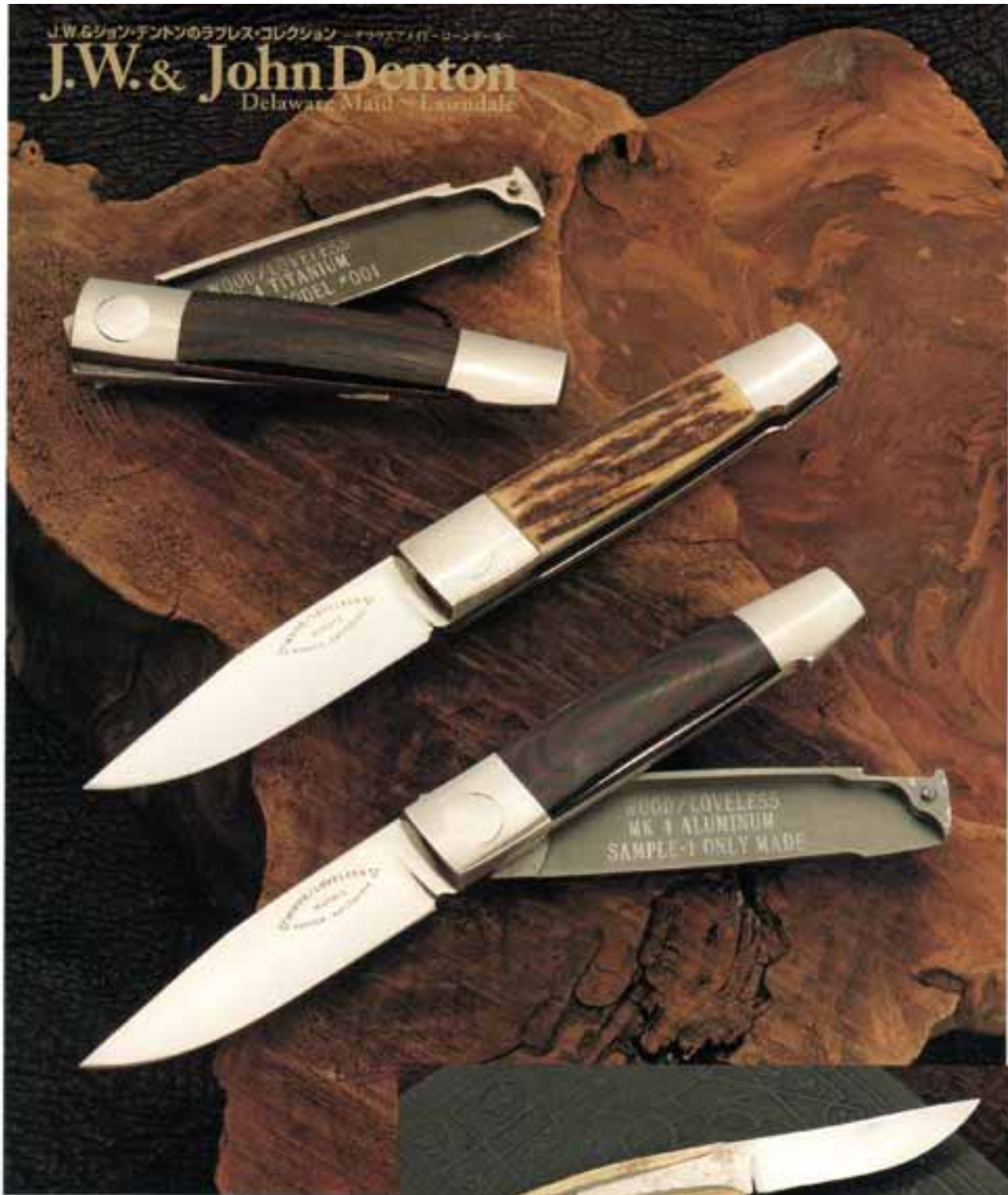


LOVELESS/JOHNSON
"Drop Point Hunter"
 ブレード長3 1/2インチ、全長5インチ。これも約40年しか存在しないといわれる「ラブレス/ジョンソン・ロフ」の内の1本。中央部に凹凸なくくちみを見せるハンドルが美しい。

J.W.&ジョン・デントンのラブレレス・コレクション — ナマケモノナイフ — ロンドン

J.W. & John Denton

Delaware Maid ~ Extradale



WOOD-LOVELESS "Folder"

ブレード長2.12インチ、ハンドル長4.12インチ。10ヶ月の間だけ制作された、パリー・ウッド/ボブ・ラブレレスのコラボレーションフォルダー。ハンドルはカステラム材に、ステンレス、アルミ、チタンという違いはあるが、メーカーで区別が付けられなかった。写真では、上からチタン製、ステンレス製、アルミ製、となる。チタンとアルミのモデルはサンプルで1本ずつだけ作られたもの。

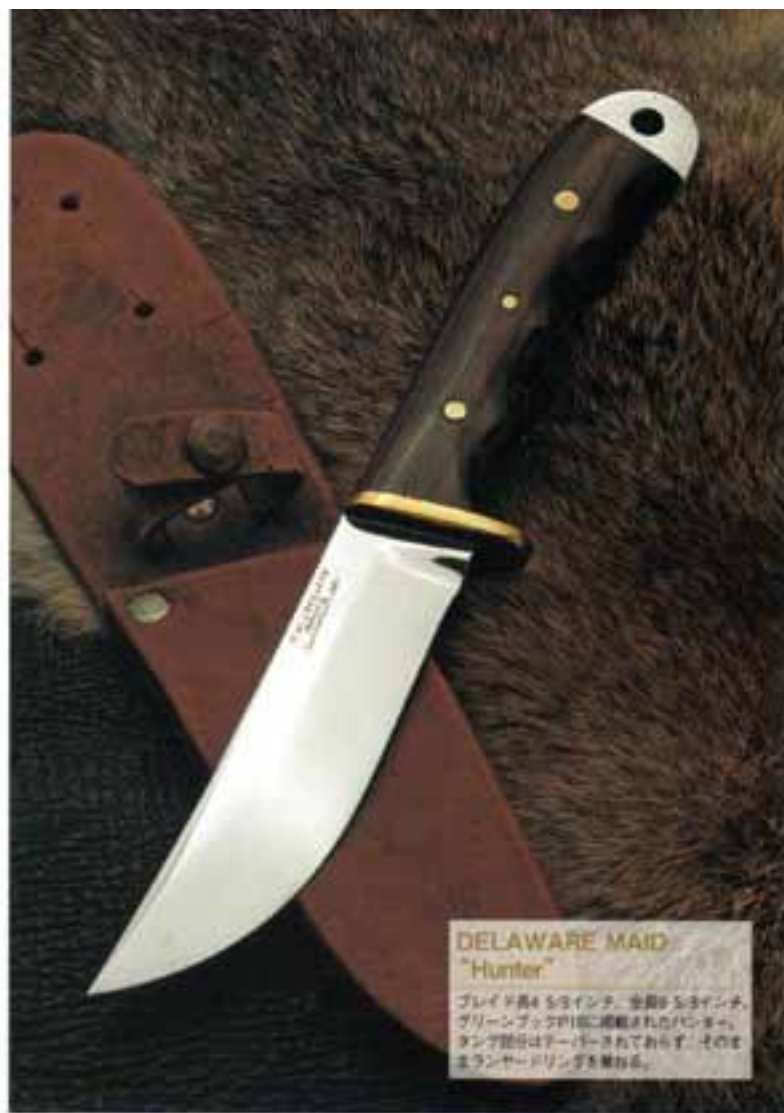
"Hidden Tang Utility"

ボブのヒドゥンタンク構造を見せるためにハンドルをカットされたモデル。タンク部分は切り欠けがあり、どんなに深く使っても抜けてくる事はない。

"Hidden Tang Micro Blade"

ブレード長2.12インチ、全長6.12インチ。





**DELAWARE MAID
"Hunter"**
ブレード長4.53インチ、全長8.53インチ、グリーンブッシュ鋼に研磨されたパインダー、タンク部分はテーパードされています。そのまゝランヤードリングも兼ねる。



「それじゃあ、ここから」と開けてくれたセイフの扉。ふまを伴った美しい風景はコレがジョブでそうぞうと出てくる。

デラウェア州のラブレナイフを造った事のある人なら、このボブの決意はナイフの造作からありありと感じることが出来る。特にオーダーを受けて作られたナイフは、一本一本ハンドルの厚みや長さが違い、スペイサーやパットまでもがいろいろ吟味して作られているのが当然なのだ。

このデラウェア時代は、最初のナイフが作られた1954年に始まり、1960年にボブがカリフォルニアに移住するまで続く。勿論製作本数は少なく、その稀少性は絶大だ。

その後南カルフォルニアに移ったボブは、すぐに機械工場に就職し、さらには自分の工場を経営するまでになっていく。

仕事は忙しい。それでもナイフの制作は続けていた。住居も転々としていたのでラブレスロコに入る住所も、ノースハリウッド、シエラマドレと変遷を続けている。1967年には、シエラマドレの住所で初めてのパートナーシップナイフとなる。ラブレス&パーク、ロゴのナイフを製作もしている。

その後、カリフォルニア州ロインデル市に工場を移し、新しいデザインコンセプト、つまり現在のモデルラインに繋がる革新的な作品を輩出し始める。このロインデル期は、ボブにとっても大きな変化が続くターニングポイントといえる。

まず、1969年、仕事を辞め、フルタイムメイカーとして自立する。それまでは委託を中心にナイフを売っていたが、1971年に、ガンダジエニスト誌の50周年号にカスタムナイフメイカーとして紹介されると、一気にオーダーが入るようになっていく。同じく1971年には、あのステイヴ・ジョンソンが製作パートナーとしてジョインした。彼のアシストがラブレナイフに与えた影響は大きく、ボブは仕事に追われるだけではない、無欲的な作品を次々に発表し続けている。

そのナイフデザインにおいても、ドロップポイント、セミスキナー、ダブルグラインドのファイター、ビッグベアーなど、その後のラブレナイフの基本となるナイフ達がこの時期に急速な熟成を続けていっている。

ロインデル期は、ラブレナイフの機軸と発展の時期だったのである。

今回の取材では、そのコレクションの全量度から、当初2日間の予定だった撮影は伸びに伸び、合計70本以上のナイフ

を記録する事が出来た。なにせ、門外不出の貴重なナイフ達ばかりなので、その撮影には様々な制約があり、どこまでこれらのナイフが持つ、濃み、を油出出来たかは、はなはだ心許ない。それでもこれら極数のナイフを皆さんと共有できる機会を与えてくれた、J.W.とジョンには心から感謝を捧げたい。



**DELAWARE MAID
"Half Tang Skinner's"**

ブレード長3.38インチ、全長7.12インチ。ラブレナイフ特約のハーフタンク構造を持つスキナー、シカゴにあった「Van Lengenke & Artzke」というスポーツ用品店の海に作られた7本のうちの2本。